

さつま × しごと

Vol.51



みこし しんご
三腰 真吾 さん (45)

泊野地区出身。
両親と妻、3人の子とも泊野地区で暮らしている。
年間数回は同世代の4家族と「キャンプ場で飲む美味しいお酒と、子どもたちの楽しそうな姿を見る時間」を共有している。消防団員としても活動中。



介護福祉士 × 三腰 真吾

▼「当施設は、59人の利用者が入所しており、主に要介護3以上の方で日常的な介護を必要とする利用者が多い施設です。そのため、職員は夜勤を含む変則勤務体制で、食事介助、入浴介助、移乗介助など利用者の日常生活を支援しています」利用者と接するうえで、三腰さんの心がけているポイントなどを伺ってみました。

▼「私が担当する4人の利用者のうち2人は100歳以上の方ですが、

▼「当施設で介護職として働き始めたのは、専門学校を卒業後、20歳の時でした。高校生の頃、パーキンソン病を患う祖父の介護を手伝った経験があり、それが介護従事者となるきっかけになったと思います」と当時を振り返る三腰さん。アルテンハイム鶴宮園以外の介護施設での勤務も経験し、昨年から再度勤務することになりました。

▼「さつま町の高齢化率は6月時点で43・3%、このうち介護認定率は19・7%となっており、介護が必要な方へさまざまな介護サービスが提供されています。今回は、紫尾地区にある特別養護老人ホームアルテンハイム鶴宮園で介護福祉士として働く、三腰真吾さんに話を伺いました。



コロナ禍を機に始めたキャンプ。休日を調整して県内外のキャンプ場へ出かけている。

▼「当施設でもミャンマーからの技能実習生3人が勤務するなど、介護現場も日々変わりつつありますが、職員同士でコミュニケーションを取りながら働きやすい職場づくりに努めています。介護に関するスキルアップも図りながら、引き続き介護現場の第一線で利用者が笑顔で過ごしていけるよう、今後も努力していきたいですね」

利用者と接する際には笑顔でコミュニケーションを取るように心がけています。利用者それぞれの個性もありますが、利用者からも笑顔で応えていただけるようになると、この仕事をやっていて良かったなと思う瞬間です」と話す三腰さん。